

俳壇

神戸・松本・丸山さんに

坊城 俊樹選

【期間賞】

横たはる案山子や立ち止まる
戦車

(塩尻市) 神戸 千寛

【評】これは何処の戦場なの
だろう。ウクライナかもしれぬ。ここにある戦車はすると

ロシアのものか。侵攻の途中で倒れている案山子にふと立ち止まった。そこは平和の瞬



神戸千寛さん

間でもある。しかしすぐにまた戦場へと発進した。案山子という人型のものが何処か平和の残滓のようなものに見えて仕方がない。そして「横たはる」という状況がやはり戦死した兵士や農民への哀悼であらう。

【次席】

向日葵や天動説を疑はず

(飯田市) 吉沢 奨

【評】向日葵とはその名の通り、太陽の動きにつれて回るとされている。実際にはそんなにグルグル回るとも思えないが、こう言われてみると天が向日葵の周りを動いてそれを見上げているようにも思われる。向日葵の句としては見

たこともないユニークな発想。天動説はエウドクソスの理論らしいが、たった十七音でこんな物語が生まれる。

神野 紗希選

【期間賞】

臥せる姉山茶花見せに抱いて

(長野市) 松本 宏要

【評】山茶花が咲いたのを見せたくて、病床の姉を抱きか



松本宏要さん

かえ、縁側まで連れていく。幼いころから姉弟の時間のほとりに咲き続けてきた、実家の庭の山茶花だろうか。抱えた姉の体の軽さにハッと驚きつつ、その体温に命のぬくもりを確かめもする。姉の見る山茶花、私の見る山茶花。冬の乏しい光の中で、花びらの赤が、家族の記憶が、懐かしく灯る。あふれる人間の善性が、切実にして愛おしい。

【次席】

幾度も川は名を変へ豊の秋

(松本市) 久我 綺乃

【評】千曲川が新潟では信濃川と呼ばれるように、川は上流から下流へ、土地ごとに名前を変えて流れる。取り合わず「豊の秋」は、秋の稔りを寿ぐ季語だ。この季語によつて、水とともに暮らして

きた風土の歴史が広がり、川と水田のある風景がまぶしく輝く。古来、川のほとりに文明は興る。自然と共存する人間の素朴で敬虔な営みがどつしりと肯定された、まさに「豊」かな一句である。

今井 聖選

【期間賞】

立冬や子の温もりを懐かしむ

(大田市) 丸山めぐみ

【評】母に抱かれたときの温もりを子がいつまでも懐かしむというのは通念。子を抱い



丸山めぐみさん

たときの温もりを母の方が懐かしむのは前者と似て非なる感慨と言つて良いだろう。しかし、子が感じる母の温かさも母が感じる子の温かさも産む側と生まれる側が共有する本能的感覚と思うと男性としては何か羨ましい気がする。

【次席】

後ろ手の鴉植田を二歩三歩

(松本市) 伊藤 和夫

【評】地上のものを拾う習性からか鴉が歩いているのをよく見かける。その歩き方も独特で何か見回りをするふうにも見え、後ろ手をしながらという形容もびつたりである。植田の周辺を見回るがごとくと作者は感じたか。鴉の風情が的確にまたユーモアたっぷりに描かれている。普段は嫌われ者の鴉が可愛く見えてくる。